〔研究論文〕

# メランヒトン「カテキズム」の特徴と展開

菱 刈 晃 夫

本稿は、これまでのメランヒトン「カテキズム」に関する研究を総括するものである。メランヒトンのカテキズムを振り返り、その本質的特徴を再確認すると共に、1548 年のカテキズムにあらわれる人間観をおさえ、さらに彼の作品を、より分かりやすく、より簡潔に展開した、当時の著作(ヴァリエーション)を簡単に取り上げることで、「カテキズム」の全体的特性を浮き彫りにすることを試みる。結果として、メランヒトンの自然法思想や、それを裏づける「自然の光」(lumen naturale)説の受容と発展の歴史へと、本研究は発展していくことになる。最後に、現代教育への示唆にも触れている。

**キーワード**：カテキズム　悔い改め　疚しい良心　覚醒　自然法　自然の光
ルター的なるもの　カント

## はじめに

本稿は、これまでのメランヒトンのカテキズムに関する研究を総括し[*1]、その特徴を鮮明にしたうえで、まだ考察されていない著作、および同時代における他の著作家による作品のいくつかにも光を当てることにより、メランヒトン「カテ

---

*1 平成 31 年度科学研究費助成金(基盤研究 C、課題番号 19K00112「メランヒトンのカテキズムに関する研究」)による一連の成果、①拙稿「メランヒトンとアグリコラ ― カテキズムをめぐって ―」国士舘大学人文学会編『国士館人文学』10 号(通巻 52 号)所収、2020 年、21-45 頁、②拙稿「メランヒトン『巡察指導書』の背景と内容 ― 法の価値と自由意志を強調する理由 ―」国士舘大学人文学会編『国士館人文学』11 号(通巻 53 号)所収、2021 年、99-121 頁、③拙稿「メランヒトン『子どものカテキズム』の構造と特質」国士舘大学大学院人文科学研究科編『国士館人文科学論集』3 号、2022 年、16-29 頁、参照。

キズム」の全体的特性を浮き彫りにしようとするものである。

そもそもメランヒトンのカテキズムとはいっても、そのタイトルや内容はさまざまである。むしろ「カテキズム」という表題を堂々と掲げているのは『子どものカテキズム』(Catechesis　Puerilis)ぐらいであるが、しかしカテキズムというジャンルに含まれるメランヒトンの作品(Katechetische　Schriften)は、コールズによって 11 点あげられている[*2]。これまでのメランヒトンの「カテキズム」を振り返り、まずはその本質的な特徴について確認しておこう。

## 1 節　一連の「カテキズム」

コールズはメランヒトンの「カテキズム」作品として、Supplementa Melanchthoniana (メランヒトン作品補遺)に、以下 11 点を収録している。

① In caput Exodi XX Scolia. 1523. : Eine kleine Auslegung über das 20.Kapitel des 2. Buches Moses. 1525.
② Enchiridion elementorum puerilium. 1523(?). : Handbüchlein. 1524.
③ Paraphrasis Dominicae Orationis. (Vor 1526)
④ Etliche Sprüche, darin das ganze christliche Lenben gefaßt ist. 1527.
⑤ Kurze Auslegung der zehn Gebote. 1527(?).
⑥ Kurze Auslegung des Vaterunsers. 1527(?).
⑦ Eine kurze Auslegung der zehn Gebote, des Vaterunsers und Glaubens. 1528. (Fragment)
⑧ Catechesis Puerilis. 1543, bzw. 1540. : Catechismus , das ist Kinderlehre. 1543.
⑨ Kurze Auslegung des Vaterunsers. 1547, bzw. 1542.
⑩ Catechismus, Deutsch und lateinisch. 1548.
⑪ Die zehn Gebote, der Glaube, das Vaterunser. 1549.

この他にもメランヒトンの存命中、同時代人によって発展的に展開された複数の作品が収録されているが、そのうちの２つについては 3 節で取り上げる。

すでに①から⑧の著作については、成立に至る歴史的・社会的・思想的背景を

*2 Cf. Cohrs, Ferdinand (Hg.): Philipp Melanchthons Schriften zur Praktischen Theologie. Teil I. Katechetische Schriften. Leipzig 1915. S.XVI.

明らかにしつつ考察を重ねてきた[*3]。その集大成が『子どものカテキズム』である。この特質は、次のように小括されていた。

> 心の最内奥に働きかけようとするメランヒトンの教育思想は、このカテキズムに典型的にあらわれている。その究極の目的は良心の覚醒と悔い改めによる心の純化もしくは再生にある。しかも律法と福音の働きによって生きている限り死に至るまで続けられるべき再生である。人間の心の、あるいは人間の中の罪は、生きている限り決してなくなることはない。ただ神と人間との和解をとりなす仲保者としてのキリストのゆえに赦されている(大目に見られている)だけである。こうした自覚を常に保ちながら再生を続けることで、人間の内面に働きかけるキリスト教的教育 — 宗教教育 — がなされる一方、他方で人間の自然本性に信頼する人文主義的教育、すなわちヒューマニズムによる教育も進められる。キリスト教的ヒューマニスト(人文主義者)としてのメランヒトンの、とりわけメランヒトン神学に基づいた教育思想の核心部分を、このカテキズムはもっとも完成した形で表現しているといえよう[*4]。

良心の覚醒と悔い改め。とりわけ「悔い改め」(poenitentia, Buße)がメランヒトン神学すなわちメランヒトン思想の中核にあることは、早くからノイザーによっても指摘されている。「メランヒトン的神学の中心概念は恩恵ではなく、悔い改めである」[*5]。メランヒトン神学の中心的問いは、「人間は罪の赦しをどのようにして受け取るのか? 」にあるとノイザーは述べ、「神的な救済〔神による救い〕の知らせを人間学的に捉えるところにメランヒトン神学の特徴がある」[*6]。よって次が重要である。

> それゆえに彼は恩恵を受け取り手〔人間〕の倫理的な準備〔素質〕なしに考察することはできない。いまや悔い改め概念は、両者、つまり神による恵みのわざと人間の振る舞い〔態度や行動〕の仕方を含み込んでいる。メランヒ

---

*3 注 1 に掲げた以外にも、拙稿「メランヒトンのカテキズム —「再生」への準備としての教育 —」教育哲学会編『教育哲学研究』88 号、2003 年、1-17 頁、参照。同論文は拙著『近代教育思想の源流 — スピリチュアリティと教育 —』成文堂、2005 年、165-184 頁、にも彫琢が施されたうえで再録されている。

*4 注 1、③「メランヒトン『子どものカテキズム』の構造と特質」、29 頁。

*5 Neuser, Wilhelm H. : Der Ansatz der Theologie Philipp Melanchthons. Neukirchen 1957. S.107.

*6 Ibid.

トンのすべての思考は、悔い改めを中心にしている」[*7]。

「悔い改め」がメランヒトンの人間学にとっても極めて重要な問題であり、かつ中心的概念であることをノイザーは、「これより悔い改めは彼の神学体系の主題〔主要モチーフ〕であり、そこにすべての作品が並立している」[*8] と表現する。人文主義(ヒューマニズム)を基盤としながらも、人間の心の純化と再生に究極的な照準を合わせるメランヒトンの教育思想において、まさに悔い改めは、最大かつ最終の問題であったことが、ノイザーからの見解からも裏づけられる。

またハウサムマンもノイザーをうけてメランヒトンの悔い改め概念について、目立つ特徴を大きく３つ列挙している[*9]。まずは①メランヒトンにおいて悔い改めは、ルターにおけるよりも明確に、その信仰理解の中心にあり、それはメランヒトン神学の発展の中で終始一貫していたこと。これは 1521 年に初版が出される『神学要覧』(通称ロキ)の改訂内容を辿ることでも明らかである[*10]。次に②メランヒトンの悔い改め説は、ルターのそれよりも全体的に見て矛盾が少なく、定式化されていて理解しやすかったこと。それは、これまでの論考の中で見てきたカテキズムの内容や構造からも明らかである。そして③メランヒトンの悔い改め理解は、『巡察指導書』(Unterricht der Visitatoren an die Pfarrherrn im Kurfürstenthum zu Sachsen, 1528)や『アウグスブルク信仰告白』(Confessio Augustana, 1530)等の、いわば公式文書によって定式化され、同時代や後世の人々にも、これぞ典型的に「ルター的なるもの」として印象づけられたこと。

ともかくメランヒトンは、ヴィッテンベルク大学に着任した当初より、人文主義的研究と教育を怠ることなく、あくまでもこれを基礎として、常に人間の心の純化と再生に、神学的にも、そして人間学的にも大きな関心を寄せていたことは明らかである[*11]。すでに『巡察指導書』での悔い改め理解については詳しく取り上げているので[*12]、ここではメランヒトンの「カテキズム」の中核でもある悔い改めについて、「ルター的なるもの」の代表である『アウグスブルク信仰告白』から補足しておきたい。第 12 条が悔い改めについてであるが、ドイツ語版とラ

---

*7 Ibid.

*8 Ibid., S.107f.

*9 Hausammann, Susi : Buße als Umkehr und Erneuerung von Mensch und Gesellschaft. Zürich 1974. S.135f.

*10 Ibid.

*11 拙著『メランヒトンの人間学と教育思想 — 研究と翻訳 —』成文堂、2018 年、5 頁以下、参照。

*12 注 1、②参照。

テン語版の二種類がある。まずはドイツ語版では、こうである。

> 悔い改めについては、次のように教える。すなわち、洗礼後罪を犯した人であっても、悔い改めるならばいつでも、罪のゆるしを得られる。そして、教会は彼らに対して罪のゆるしを拒んではならない。真の正しい悔い改めは、もともと罪についての痛悔と、悲しみと恐怖とをもち、またそれとともに、福音と罪のゆるしについて信じることにほかならない。そうすれば罪はゆるされ、キリストによって恵みが与えられる。この信仰はまた、心を慰め、平安を与える。ついで、生活の改善が生じ、また罪から解放される。これらのことは、悔い改めの実であるはずであって、それは、マタイによる福音書第三章〔八節〕にヨハネが「悔い改めにふさわしい実を結べ」と言うとおりである。
>
> ここにおいて、ひとたび信仰を得たものは再び堕落することはないと教える人々を斥ける。
>
> また、これに反して、洗礼後罪を犯した者に対する赦免を否認するノヴァティアヌス派を異端と宣言する。
>
> 同様に、信仰によってではなく、われわれの償いの行いによって罪のゆるしを得ると教える者たちをも斥ける[*13]。

悔い改めは、「痛悔」(reu)と「信仰」(gleuben)の二つから成り立っている。が、その中でもとりわけ痛悔、つまり罪の認識による悲しみと恐怖、あるいは恐れ〔怖れ・畏怖〕による良心の震撼と覚醒に、メランヒトンのカテキズムは心の純化と再生のための起点として、その力点を置いてきた。そしてさらに、再生者による生活の「改善」(besserung)と悔い改めの「実」(früchte)が強調されることになる。さらに再生は死に至るまで続けられるべき心の内的純化のプロセスであり、私たちの「行い」(wreck)によるのではなく、あくまでも「信仰」によることが繰り返されている。

次にラテン語版では、こうである。

> 悔い改めについて、われわれの諸教会はこう教える。洗礼後に堕落した者も、回心すればいつでも、罪のゆるしをうけることができる。そして、教会は立ちかえって悔い改める者にゆるしを与えなければならない。しかしながら、悔い改めはもともと二つの部分から成り立っている。ひとつは痛悔、すなわち罪の認識によって良心をさいなむ恐れであり、いまひとつは信仰であって、

*13 信条集専門委員会訳『一致信条集』聖文舎、1982 年、41-42 頁。下線引用者。

それは福音あるいは罪のゆるしから生じ、そして、キリストのゆえに罪がゆるされていることを信じ、良心を慰めまた恐れから解放する。ついで、悔い改めの実である善い行いが、必然的にこれに伴うはずである。

われわれの諸教会は、ひとたび義とされた者も聖霊を失うことがありうるということを否定する再洗礼派を、異端と宣言する。また人はこの世において、罪を犯すことができないほどの完全に達しうると主張する人々をも異端と宣言する。

また、洗礼後堕落した人々を、彼らが立ちかえって悔い改めても、ゆるそうとしなかったノヴァティアヌス派も異端と宣告される。

さらにまた、罪のゆるしは信仰によって与えられると教えず、自らの償いによって恵みに値するようになることをわれわれに命じる人々も、斥ける[*14]。

ラテン語版のほうが、より明確である。悔い改め(poenitentia)とは(神に向けて)「向きを変えさせられる」こと、つまり「回心」(conversio)であり、これは「痛悔」(contritio)と「信仰」(fides)の二つ(の部分)から成り立っている。また同じく「悔い改めの実」(fructus poenitentiae)としての「善い行い」(bona opera)が必然的に続かなければならない(sequi debent)。しかも生きている限り再生に限りはなく、また完成もない(完成 perfectio には到達しえない)。人間は常に再生を繰り返さなければならない。もちろん自分たちの「償い」(satisfactio)の行いによって罪の赦しが得られるわけでもない。それはあくまでもキリストへの信頼としての信仰によるのみである。

『アウグスブルク信仰告白』における定式化からも、こうした「痛悔」と「信仰」からなる「悔い改め」が、メランヒトンの「カテキズム」の中核(本質的な特徴)であることは、容易に特定かつ再確認されよう。この悔い改めを引き起こす起点として、罪の認識と、それに伴う良心の震撼と覚醒が求められたのであった。ゆえに、これまでも見てきたように、律法や十戒の役割がメランヒトンの中では極めて大きな意味を持っていたのである[*15]。しかもメランヒトンは死に至るまで再生者(renatus)に対して、「悔い改めの実」としての行い、(決して目的としてではなく)あくまでも結果としての行い、つまり私たちの生の改善を要求する。こうした特徴からもメランヒトンの神学は、結論として人々の成長を目指す、もともと極めて倫理的かつ教育的な性格を帯びているといえよう。先のノイザーは、メランヒトンにとって「信仰は方法的なプロセス」であり、「信仰の心理学化」

*14 同上。

*15 注 1 の文献、および拙著前掲の他、拙著『ルターとメランヒトン教育思想研究序説』溪水社、2001 年、175 頁以下、参照。

(Psychologisierung des Glaubens)が見られるという[*16]。いずれにせよメランヒトンには教育(方法)学的な指向性が顕著に見いだされる。それは、心の純化と再生という神学的にも困難な課題に取り組むことから生じる、ヒューマニスト(人文主義者)としての本分に由来するといえるだろう。ここからも彼はドイツの教師(Praeceptor Germaniae)との尊称にふさわしい。

## 2 節　1548 年カテキズムにあらわれる人間観

では残る⑨⑩⑪に移ろう。とりわけ⑩はカテキズムと名づけられた数少ない著作の一つであるので、少し詳しく見ておきたい。しかも、ここにはヒューマニスト・メランヒトンとしての本来的性格や人間学的思想が如実にあらわれている。

⑨は主の祈りについて、⑩は十戒、使徒信条、主の祈りについて、簡単な解説を含まれた小冊子となっている。とくに⑩は、それぞれに木版画が付されていて、視覚的にも人々に訴えかける工夫がなされている(付録参照)。

さて⑩はドイツ語とラテン語で記された、その名もカテキズムであり、見出しは次のようになっている。日本語訳を併記する。

Unterweisung.　CATECHISMUS.　カテキズム。

Was ist Gott?　QUID EST DEUS?　神とは?

Sind auch mher Götter, den einer?　UTRUM PLURES DII SUNT, QUAM UNUS?　一つの、またはより複数の神々がいるのか?

Wie sol man die gottlichen Personen unterscheiden?　QUOMODO PERSONAE DIVINITATIS DISCERNENDAE SUNT?　神的ペルソナはどのように区別されるべきか?

Warum muss man gleuben drei person, und nicht mher und nicht weniger?　QUARE CREDENDUM EST, QUOD TRES TANTUM PERSONAE SINT, NEQUE PLURES AUT PAUTIORES?　それよりも多くでも少なくでもなく、なぜ三つのペルソナを信じなければならないのか?

Warum ist Gottes son genennt des ewigen Vaters wort und Ebenbild?　QUARE

*16 Neuser, op. cit., S.66.

FILIUS DEI VOCATUR AETERNI PATRIS VERBUM ET IMAGO?　なぜ神の子は永遠の父の言葉と像と呼ばれるのか?

Von zwo Naturen im son Gottes Jhesu Christo, aus der Jungfrau Maria geboren. DE DUABUS NATURIS IN FILIO DEI IHESU CHRISTO EX VIRGINE MARIA NATO. 処女マリアから生まれた神の子、イエス・キリストの中の二つの本性について。

Von unterscheid zwisschen Christlicher anruffung Gottes und aller andern anruffung, heidnischer Turckicher etc.　DE DISCRIMINE CHRISTIANAE INVOCATIONIS DEI, ET OMNIUM ALIARUM INVOCATIONUM, ETHNICAE, MAHOMETICAE ETC.　キリスト教的な神への祈願〔祈り〕と、他のすべての祈願、異教的なトルコ人的〔イスラム教徒的〕等のものとの違いについて。

Von der Schöpfung.　DE CREATIONE.　創造について。

Von erhaltung der erschaffnen Wesen.　DE CONSERVATIONE RERUM CREATARUM. 創造された事物〔被造物〕の保持について。

Von schaffung der ersten Menschen Adam und Heva.　DE CREATIONE HOMINIUM ADAM ET HEVAE.　最初の人、アダムとエバの創造について。

Was ist das ebenbild Gottes im menschen?　QUID EST IMAGO DEI IN HOMINE?　人間における神の像とは何か?

Von den furnemen krefften menschlicher Natur.　DE PRAECIPIUS POTENTIIS HUMANAE NATURAE.　人間本性の卓越した〔優れた特別の〕能力について。

冒頭で、メランヒトンの人間観が極めて簡潔に記されている。基本的に彼は、こうした人間観や神観に基づいて教育思想を構築していることが分かる。

1.神は人間を、地上で理性的な被造物となるべきものとして創造した。この〔人間〕の中に神の知識は輝き、〔これに〕神はその大いなるもの、知恵、善意、義、純潔を授けた。2.なぜなら神はその善意を自身のためだけに有するのではなく、それを他者に伝達しようと欲し、それゆえに天使と人間を永遠の命へとつくり、人間を堕罪後も再び大いなる憐れみから受け入れ、自身

を公に明らかな奇跡によって啓示したのであり、こうして人は誰が神であるかを確かに知ったのである。3.そして私たちにその言葉を、その法を、そして恵み深い約束を与えた。こうして私たちはこの〔言葉の〕中で、神が私たちに再び永遠の命を与え、私たちに永遠に、その賜物を、知恵を、善意を、義そして純潔を伝達していて、私たちはそれを賛美し感謝する、ということを学ぶことができるし、こうしたことを嘆願できるのである[*17]。

つまり神は人間を「理性的な被造物」(ein vernunffige Creatur)として創造したのだ。要するに、この理性あるいは精神(mens)における優れた力によって、人間は、たとえ堕罪後であれ、本来の「神の像」(imago Dei)を回復し続けることができる、という希望と可能性に、メランヒトンの教育思想は依拠している。このカテキズムでは、神論や三位一体論、キリスト論などが記されているが、とりわけ最後からの二つ、人間における神の像、および人間本性の卓越した力について述べられている箇所が、心の純化と再生を究極目的とするメランヒトン教育思想の、ヒューマニズム的な原理的土台になっていることが再確認される。

まず神が、今も生きて働いている神であるとされた後、神は人間を今も常に愛していることは、私たちの父母が子を愛するのと同様であるように、と語られてから、その人間の中の神の像とは何か、それはどのような機能を持つのかが明らかにされる。人間における神の像とは、すなわち人間の魂(anima, seel)における働きである。

こうして人間の魂の中にまず理性がつくられた。その中には光があるが、それは知恵であるが、神の知恵と一致していて、それは神の認識と正と不正の間の区別である[*18]。

まず「理性」(ratio, vernunft)とは「光」(lux, liecht)であり、それは「神の知恵」(sapientia divina, gottlicher Weisheit)であり、「神の認識」(agnitio Dei, Gottes erkentnis)であり、「正と不正の間の区別」(discrimen inter recta et prava, unterscheid zwischen tugent und untugend)である。最後は、ドイツ語からすれば「徳と不徳」あるいは「美徳と悪徳」とも訳出できよう。人間の魂には本来こうした理性と光が備わっている、と見るところから始まるのがメランヒトンの人間学である[*19]。

---

*17 Cohrs, op. cit., S.342f.

*18 Ibid., S.356.

*19 拙著前掲『メランヒトン人間学と教育思想』、26 頁以下、参照。

加えて人間の中には自由意志もつくられている。これは神に従うことができたし、あるいは従わないこともできた。そして意志にはすべての徳が備わっていた。神への隣人への愛や、人間への善意や善行、心理、純潔、義であり、これは正しい者への愛であり、不正な者への怒りである[*20]。

次に「自由意志」(voluntas libera, freier wille)には人間のすべての徳(virtus)が賦与されていた(praedita fuit)とされ、私たちは神に従うことも、従わないこともできた(potuit)。が、アダムとエバにより「従わない」という不従順が選択されて以降、私たち人間はみな神への不従順という罪の中に置かれている。しかし、神や隣人への愛といった諸々の徳が、これ〔堕罪・原罪〕以降すべて消滅してしまったわけではない。

ゆえに人間の魂の中にある神の像は、まず知性に生みだされ〔もたらされ〕ていて、そこには神の認識が輝いている。次いで自由意志であり、卓越した徳によって飾られている[*21]。

ここで「知性」(intellectus)とは「理性」と同義に扱われている。また「神の像」(effigies Dei)もイマゴ・デイと同様である。要するに、人間における理性と自由意志の働きに神の像が表現されているとするのがメランヒトンの人間観のスタート地点であり、これは人間が生来的かつ本性的に持つ資質でもある。ここからさらにメランヒトンは人間が持つ、その本性の卓越した〔優れた特別の〕能力について述べて、このカテキズムを終えている。この能力は三つである。

魂の卓越した能力には三つある。まずは内的そして外的な感覚であり、これによって私たちは物事を把握し判断する[*22]。

「外的な感覚」(sensus exteriors, eusserlichen sinn)とは目や耳などの外的感覚であるが、「内的感覚」(sensus interiors, innerlichen sinn)は「脳」(cerebrum, hirn)の中にあり、それは判断や記憶をつかさどり、そこに「理性」も属しているとメランヒトンはいう。これこそは「人間の精神」(mens humana)でもある。

そこに生来的に数の観念や数々のその他の知識が刻印されていて、それらを

*20 Ibid., S.356f.

*21 Ibid., S.357.

*22 Ibid.

> 神は最初の創造の際に魂〔人間の本性〕の中に置いたのであった。こうして自然法の知識が〔私たちには生まれつき〕あるのであって、それは光であり、それを神は、人間をつくるときに、精神そのものの中に点火したのであり、これは十戒と一致している。というのもこれらの教えは数と同じく生来的に〔自然に〕知られる〔認識される〕からである[*23]。

魂の卓越した能力(potentiae, kreften)として、第一に感覚があけられているが、その実態は脳に宿る精神であり、先ほどより神の像としての人間の資質として冒頭あげられている理性もしくは知性の働きである。メランヒトンによれば、ここには数の観念と同じく、十戒と一致する「自然法の知識」(notitia legis naturae)も、精神に輝く光として、生来的に植え付けられて(gepflanzt, impressa)いて、神はこれを点火して(accendit)いる。人間は、こうした自然法や十戒を生来的に、自らの魂の中に、神の像の機能として〔神的光として〕見いだすことができるはずであるから、これが私たちの人生を支配すべきであり、徳と不徳とを示して、不徳を罰し、どのような行いを神は私たちから求めているのかを知るべきである、という。ともかく脳には、こうした理性や知性の能力が備えられていて、これが知識をつかみ、識別し、保持する。

> もう一つの能力の座は、心である。この中に強い欲望と楽しみがあり、そこから生じてくるのが、憎しみ、喜び、悲しみ、希望、恐れ、不安、恐怖、怒り、嫉妬、憐れみである[*24]。

第二にあげられる能力は「心」(cor, hertz)にあるが、これは要するに感情あるいは情動の働きに他ならない。またメランヒトンにおいて心とは、具体的に「心臓」を指し、心は心臓に宿っている[*25]。これが各人各自に「経験」(experientia, erfarung)を教える。私たちが楽しんでいるとき、心〔心臓〕は拡張させられるが、悲しみの中にあるとき、同じく心〔心臓〕は委縮させられる。さらに心の動き〔情動〕(motuum cordis)の中で注目されるべきことは、どのように罪と悪しき〔疚しい〕良心が恐怖をもたらすのか[*26]、ということである。メランヒトンにおいて「疚しい良心」(mala conscientia, bose gewissen)は、「心(臓)」の中で情動や感情として作用する心の働きであり、これが魂の卓越した能力としての第二となる。

---

*23 Ibid., S.357f.

*24 Ibid., S.359.

*25 拙著前掲『メランヒトン人間学と教育思想』、26 頁以下、300 頁以下、参照。

*26 Ibid., S.359f.

そして第三は、やはり自由意志である。すでに先にも述べたように、人間には少なくとも外的な行いを選択したり、外的な肢体に命令したりするような自由意志は残されているが、しかし堕罪後は極めて不完全(不従順)なものとなってしまったので、常に「規律」(disciplina, zucht)や「支配」(gubernatio, Regiment)が保たれるようにし、神の言葉を私たちは受け取るようにしなければならない。最終的には理性が支配し、自由意志が高潔な行いを選択し、外的な肢体に命令して制御し、義務の中に引き留めなければならない[*27]、とメランヒトンは締め括っている。

このように 1548 年のカテキズムでは、神の像としての人間を、理性と自由意志という二つの資質に求め、その能力を理性、感情、自由意志の三つに分けて説明するのに、多くの紙幅を割いている。ここにメランヒトンの教育思想が依拠する人間観、さらには人間学が、あらためて明確にされている。しかも心の純化と再生に必要不可欠な良心の覚醒、すなわち「疚しい良心」の働きは、情動的・感情的な心の動きであることも明示されている。

## 3 節　同時代人による展開

以上でメランヒトンの「カテキズム」を一通り考察し終えた。良心の覚醒と悔い改めによる心の純化と再生に向けて、まずは人間の心を動かすために、メランヒトンが律法の役割をもっとも重視する様子を、当時の歴史的・社会的状況と照らし合わせながら、思想史的にも明らかにしてきた[*28]。

さてメランヒトンが生きた時代には、すでに彼の作品を、より分かりやすく、より簡潔に展開した著作(ヴァリエーション)がいくつもあらわれた。コールズによる資料集から、そのうち二つを簡単に取り上げておきたい[*29]。

まずは『子どものカテキズム』のアレジウス(Alexander Alesius, 1500-1565)によるラテン語版(1550)と、アグリコラ(Stephan Agricola, 1491 頃-1547)によるドイツ語版(1551)である。両者は縮約版で併記されて収録されている。内容をいくつかピックアップしてみよう。

> カテキズムとは何か?　最初の教えであり、その中に全福音のすべてが簡潔に教えられていて伝えられている[*30]。
>
> カテキズム教師の職務とは何か?　キリスト教会では以前、司教や司祭だけ

*27 Ibid., S.361.

*28 注 1 参照。

*29 Ibid., S.397-404.

*30 Ibid., S.397.

ではなくカテキステン(教理問答者)もまた、つまり、教師がいたのであり、彼らは子どもや若者を、彼らが洗礼を受ける前に、教育をするのを主とする職務にあった[*31]。

2 節で取り上げたカテキズム同様、ドイツ語と平易なラテン語で記された『子どものカテキズム』改訂版は、このように簡単な問いと答えの形式をとり、ラテン語の習得にも最適であった。

次にシュパンゲンベルク(Johann Spangenberg, 1484-1550)によるロキの改訂版、1540 年の Margarita Theologica を見てみよう。

法〔律法〕とは何か?　私たちがどのようにあらねばならず、何をし、何をやめなければならないのかを命じる教えである[*32]。

自然法とは何か?　神の法の知識であり、神によって人間の本性に刻印されている。それによって神がいること、造り主であり支配者であること、善と義があること、義人には親切にし、不義な者は罰すること、神への従順が定められていることを理解する。同じく私たちは人間の社会を育むべきであり、両親には従うべきであり、人々を尊重すべきであり、援助すべきであり、誰も傷つけるべきではいことを〔理解する〕。次に従って。あなたがされたくないことを、あなたは他人にしてはならない[*33]。

自然法と道徳法あるいは十戒の間には何があるのか?　自然法はまさに神の法であり、十戒の中にあるのと、まったく同じであり、これは道徳法によって記されてあり、保たれている[*34]。

メランヒトンのロキを、同じく簡単な問いと答えの形式にして、読者に分かりやすく、その教えを伝えようとしている。まさにロキのカテキズム版といえるであろう。

福音とは何か?　悔い改めの説教であり罪の赦しと義認の約束であり、それを理性は自然に〔本性的に〕知ることはないが、神的に〔神によって〕

*31 Ibid., S.397f.

*32 Ibid., S.399.

*33 Ibid., S.400.

*34 Ibid.

明らかに〔啓示〕されている。その中で神は、自ら自身の子であるキリストのゆえに罪を赦し、私たちを義人と宣言することを、約束している。それは受け入れられることあり、聖霊と永遠の命を与え、私たちがこれを信じるようにして、キリストのゆえにわれわれに確かに訪れるのである[*35]。

このように 169 の見出しに分けて、メランヒトンのロキが、さらに極めてコンパクトな形で、学習者に理解されるように、このマルガリータ・テオロギアは編纂されている。これは教会での職務に就く者のテキストとして、当時よりドイツ語、英語、デンマーク語、スウェーデン語にも翻訳されて重宝されていた[*36]。

いずれもメランヒトンの思索と思想に沿った、「ルター的なるもの」の教育と普及に貢献する、同時代の有力なヴァリエーションの一部といえよう。

## おわりに

ルターによる宗教改革の進展に伴い、またカテキズムによる教育も盛んとなるが、同じルターの教えに忠実であるとした人々の間でさえ、当時の嵐のような社会的激変の中で、その教説にもさまざまな変異をもたらしていった。すでに見たアグリコラに端を発する反律法論争への対応からも、メランヒトンは、現実的な社会の安定や、カトリック教会に代わる教育制度の土台を、ヒューマニズムによりながら再構築する必要に迫られていた。その具体的な成果として、数々のカテキズムが成立することになった[*37]。その本質的特徴とは、あくまでも信仰のみによるルター神学を基としながら、律法もしくは法による良心の覚醒と悔い改めを開始点として、人間の心の純化と再生を、そして社会の改善を実現しようとするところにある。これは、実のところ人間の手には負えない、神の教育の範疇にあ

---

*35 Ibid., S.403.

*36 Cf. Biographisch-Bibliographisches Kirchenlexikon 「SPANGENBERG, Johannes」SPANGENBERG, Johannes - BBKL (2022 年 8 月 4 日). ちなみに、その息子である Cyriacus Spangenberg(1528-1604) の手によるカテキズムについては、山内芳文『ドイツ近代教育概念成立史研究』亜紀書房、1994 年、68-71 頁、参照。Cf. Biographisch-Bibliographisches Kirchenlexikon 「SPANGENBERG, Cyriacus」SPANGENBERG, Cyriakus - BBKL (2022 年 8 月 4 日).

*37 他にも当時よく使われたものとしてブレンツによるカテキズムがある。Cf., Weismann, Christoph : Die Katechismen des Johannes Brenz. Berlin 1990. また当時のラテン語カテキズムについての研究として、次を参照。Ohlemacher, Andreas : Lateinische Katechetik der frühen lutherischen Orthodoxie. 2010 Göttingen.

る。が、メランヒトンが究極的な関心を寄せて問題としているのは、こうした心の内奥の変容にある。と同時に、もともとメランヒトンは人文主義者である。法による良心の覚醒とはいっても、その法そのものは、自然法としての人間本性に生まれつき刻印されているはずのもの、とメランヒトンには捉えられていた。ゆえに、ここに教育への希望と可能性が開かれることになる。では、こうした自然法思想や、それを裏づける「自然の光」(lumen naturale)説を、メランヒトンはどのよう受容し発展させていったのであろうか。そのプロセスに関する研究については[*38]、稿を改めるとしよう。

最後に蛇足ながら、「ルター的なるもの」を継承し発展させていく敬虔主義[*39]、それに連なるカントは、1803 年の『教育学』(Über Pädagogik)で、こう述べている。

> われわれは訓練と教化〔文化〕と文明化の時代に生きているが、しかし道徳化の時代に生きるのはまだ先のことである。人間の現在の状態においては、国家の繁栄につれて人間の悲惨さが同時に増大していると言ってかまわない。それゆえに、こうした教化〔文化〕がまったく見出されない〔文化的に〕粗野で未開な状態のほうがわれわれの現在の状態よりも、われわれは幸福なのではなかろうかといった疑問が、いまだに存在しているわけである。というのも、人間が道徳的で賢明にならないならば、どうして人間を幸福にすることができるのであろうか〔できるわけはないからである〕。道徳的で賢明にならなければ、悪の量が減少することはないのだ[*40]。

カントのいう「道徳化」(Moralisierung)とは、「真に善い目的だけを選択するような心術」[*41] を獲得する過程である。つまり心の変容である。そして「心術」(Gesinnung)とは、まさしくルターやメランヒトンの「良心」につながる概念でも

---

*38 令和 4 年度科学研究費助成金(基盤研究 C、課題番号 22K00110「メランヒトンにおける「自然の光」説の受容と発展に関する思想史的研究」)による成果として、今後公表してゆく予定である。

*39 その流れに位置する一人エティンガー(Friedrich Christoph Oetinger, 1702-1782)のカテキズムに関しては、次を参照。三輪貴美枝『ヴュルテンベルク敬虔主義の人間形成論 —F. Ch. エーティンガーの思想世界 —』知泉書館、2007 年。ちなみに彼もまたメランヒトンと同じくテュービンゲン大学で神学を学び、やはり同じくシュティフト(神学生寮)に住んだ(M.シュミット『ドイツ敬虔主義』小林謙一訳、教文館、1992 年、194 頁)。

*40 『カント全集 17』岩波書店、2001 年、233 頁。

*41 同上書、232 頁。原語は 1803 年刊の復刻版による。

ある[*42]。

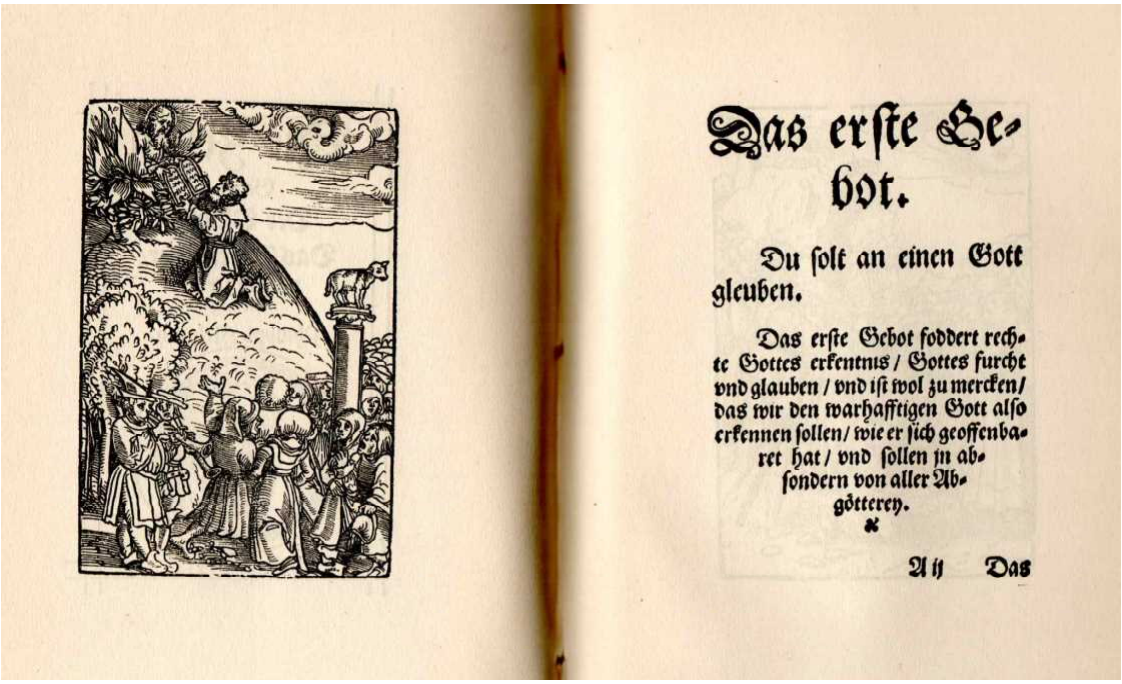
私たちは今、確かにメランヒトンやカントの時代に比べれば、多少なりとも文明化された社会に生きているとはいえるのかもしれないが、しかし国家の繁栄とは何か、といったことはグローバルな規模で根本的な問題にさらされていると同時に、人間の悲惨さも同じく地球規模で増大している時代に突入しているとはいえまいか。もしかしたら「悪の量」(Quantität des Bösen)は減少どころか、増大しているのかもしれない。いくら科学技術による物質文明が発展し、ここに教育が加担したところで、肝心かなめである人間の「心」が純化されていかなければ、この世や社会の本質は何も変わらない。皮肉にも、人々は幸福からは遠ざかってしまう。むろん、これは単なる道徳教育によって容易に成し遂げられる変容ではない。メランヒトンの時代からも苦心して、現代も、そして未来も、苦心し続けなければならない、人間の良心の覚醒と悔い改めのプロセスである。人間の本質

*42 金子晴勇『キリスト教霊性思想史』教文館、2012 年、430-436 頁、参照。

〈付録〉

コールズによる資料集より、第一戒

S.428-429.



Das erste Gebot.

Du solt an einen Gott gleuben.

Das erste Gebot foddert rechte Gottes erkentnis / Gottes furcht vnd glauben / vnd ist wol zu mercken / das wir den warhafftigen Gott also erkennen sollen / wie er sich geoffenbaret hat / vnd sollen jn absondern von aller Abgötterey.

A ij Das

を治癒しようと試みる心の純化と再生は、この世に人間が存在する限り、決して終わることなく求められ続けられねばならない、永遠に未完のプロジェクトだといえよう。

**謝辞**

本研究は JSPS 科研費 JP19K00112 の助成を受けたものです。

（ひしかり　てるお・教授）